

# 「日本幼児保育史」研究余滴（七）

津 守 真



日本保育学会の保育史小委員の一員に加えて頂いて、私がしたことは、関信三の生涯を調べただけである。何で関信三に惹かれたのか、自分でも明瞭ではないのであるが、明治維新の動乱期に、幼稚園の創設に関心をもったこの人の中には、何かそれだけの必然性があったように思えて、つい時間を費やすことになってしまった。小さなことを調べるのにも、ずいぶんいろいろの方にお世話になった。今回は、保育史余滴ということで書くことになっていたので、お世話になった方々を頭において記したいと思う。

関信三は、東京女子師範学校付属幼稚園が明治九年に開園され

たときの初代の監事であるが、倉橋惣三、新庄よしこ共著の『日本幼稚園史』の中には、然るに氏の伝といふようなものが、今日どこにも遺って居ないので、如何なる来歴を持つ人であるかについて、はっきりとわかっていないことは誠に惜しい極みである」と記されて、植村正久の福音新報の資料が引用されているだけであつた。何か手がかりが得られないかと思つているときに、日本保育史の小委員の研究会が愛育研究所で開かれた席上、宍戸健夫氏が、明治四年に横浜山手四十八番地に開かれたブライアン、クロスビー、ピアソンの三婦人宣教師による幼稚園のようなものがあることを話された。そのことが、高谷道雄氏の「ドクトル・ヘボン」という著書の中に書いてあるという。高谷道雄氏は明治学院の教授であり、早速手紙でおたずねしたところ、早速、私の家

に本を持って訪ねてきて下さった。ヘボン、明治学院の創立者であり、ヘボン式ローマ字の考案者として知られているが、もともとニュージーランドで眼科医として成功した人であり、幕末にキリスト教宣教師として日本に来た。高谷先生は、この人のことを、情熱をもって調べておられた。この老先生が、早速、著書をもって、私のような若輩の家においで下さった、その熱意に、私はいつも頭が下がる思いがする。まだ、昭和三十年代のはじめころのことである。

丁度同じころ、北星大学の教授であり、日本基督教団の牧師である加藤邦雄氏より、関信三が安藤劉太郎という名で、太政官諜者として横浜の基督教宣教師の間に入出入りしていたころの諜者報告書が、幕末明治のプロテスタント史研究家である小沢三郎氏の著書の中に印刷されていることを知らされ、戦時中に出版された粗末な紙質のその本を、加藤邦雄氏から拝借した。当時、小沢三郎氏が主宰しておられたプロテスタント史研究会が月例会をもっていることをきき、富士見町教会で開かれていたその小さな研究会に出席したこともあるが、関信三に関するそれ以上の資料は得られなかった。小沢三郎氏の著書は、何といっても、関信三のこと

を知るのに欠かすことのできない重要な文献である。小沢三郎氏は故人となられ、最近、この書物は、新たな装丁のもとに再刊行された。(小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』日本キリスト教団出版部 昭和四十八年)

やはり同じころ、故新庄よしこ氏は、私の家の真向いに住んでおられて、お赤飯など頂くことがあった。その折に、お茶の水の幼稚園にある、明治初年の『幼稚園保育の図』の掛軸を描かれた画家である武村耕靄（まがら）女史の日記を、そのご養子である武村一氏が大切に蔵しておられることを伺った。もしかしたら、何かあるかもしれないと思い、早速新庄先生にご紹介頂き、新宿の抜弁天のお宅に伺った。武村耕靄女史は、東京女子師範学校で、最初英学教授手伝、後に図画教授を長くつとめられた方である。この方が長年にわたり、毛筆、和綴の日誌をつけておられ、明治八、九年のものを、『探花孤襟』その後のものを『窓のくれ竹』と題して、数十冊に及んでいる。それらは、木の手文庫に収められ、大震災の折にも、空襲の時にも、大切に家族の方が持ち出されたものとのことであった。その日記の中には、果して、関信三の名がしばしばあらわれた。たとえば、「三月二十九日(明治九年)、関信三君より使に付午後三時より出張之所、同氏留守に付帰宅の

事。三月三十日、午前八時半に下谷中御徒町三丁目二十番地関氏へ行く事。面会仕る事。四月五日、関氏へ行く事。帰路上平岡氏へ行く事。四月七日、十時に師範学校へ出る事。英学手伝係に仰付らるること」等々である。武村耕靄女史が女子師範にこられるに当たっては、関信三の力があつた模様である。ちなみに、女史は、明治六年に横浜に出て、ブライアン、グロスビー、ピアソンの塾に入り、ここで英語を学んだ。

この日記の明治十二年のところには、関信三の死のことも記されている。「十一月五日、永井幹事内務省へ転任之事、同日関幼稚園監事病死ス。同七日、関氏葬式教員生徒六十名程見送ル。同九日、同氏の法事に招カル事」これで、関信三の没年も明瞭である。それにしても、植村正久などが、それを明治十三年四月十二日としているのは、どこからの間違いであろうか。

こうして、関信三の没年は明らかにしたのであるが、墓がどこにあるかはまだ分からなかった。墓がみつかり、他のことも分かるものである。この日記の中に、「関氏葬式教員生徒六十名程見送ル」という記事があるので、ここに手がかりがないかと考えていたとき、『幼児の教育』誌の古い号に、保育実習科や幼稚園

の昔の卒業生の思い出などが掲載されていたことがあるのを思い出した。そして、『幼児の教育』のバックナンバーに目を通しはじめたところ、昭和九年、第三十三卷第二号に、保育実習科第一回卒業生小林としの手記があり、その中に、関信三のことが記されているのを発見した。しかもそこには、関信三の病床のことなど記されており、さらに次のような文章があつたのには、全く驚いた。「関先生の功績を思ひて私共心ばかりの碑を建てました。形はフレイベル先生の碑の如く、立方体、円柱体、円体を組合わせたものを谷中のお寺に建てました」しかし、実物を見るまでは、フレイベルの墓と同形の墓が存在しようとは、半信半疑であつた。私は、早速、谷中にいった。

夏の暑い日の陽盛りの時だった。この方面に来たことのなかった私は、あちこち歩きながら、白く照りかえす広い道を歩きながら、どうして見つけたらよいか困ってしまった。谷中には寺が数えきれないほどあり、その墓の一つ一つを調べるのは容易ではない。そのとき思いついたことは、関信三は、またの名を猶龍と言ひ、東本願寺の僧籍をもつておられること、また、墓石のことだから石屋さんにたずねれば分かるのではないかということであった。谷中には石屋もたくさんあるが、その白い広い道のわきの石屋さんでたずねると、門徒衆の寺は、谷中には宗善寺だけだか

ら、そこにゆきなさいと道順を教えてくれた。このたくさんの寺のある谷中に、東本願寺派の寺は一つだけだったのは幸いであった。宗善寺という名もはじめて分かった。いくつか細い道を折れ曲って、その寺の中に入って、墓地を眺めわたした。本堂は焼けていて、バラックの建物だった。いくつか石の段落のある墓地の領域を、一つ、二つと歩き、三つ目くらいのところ、たしかに、フレibelのあの恩物の形の墓石があった。私はまだ、半信半疑のまま、墓石をなでまわした。

寺にゆき、住職さんに会い、わけを話して過去帳を見せて頂いた。「明治十二年、十一月四日(没) 関信三 金剛寺坂上金富町四拾二番地」とある。住職さんは、それ以上詳しいことを知っておられなかったが、門のわきの墓守のおじさんにたずねたところ、そのおもしろい形のお墓には、ときどき、中年のご婦人が花をあげにこられますとのことで、そんなことから遺族の方ともお近づきになることができた。この墓のわきに、遺族の手によって碑が建てられたのは、更に後のことである。

何で関信三の墓がフレibelの墓と同じ形なのだろうか。教えた子たちがこの墓を建てたのなら、関信三は、フレibelのことを、よほど尊敬の念をもって生徒たちに話したに違いない。しかし、耶蘇教授偵であった関信三が、どのようにしてフレibelに

私淑するに至ったのであろうか。疑問と想像の糸はつきるところがない。

そんなときに、教育大学の社会学の森岡教授より、金沢市郊外の松任まつとうにある本誓寺にある松本白華文庫のあることを教わった。松本白華は、明治五年に、東本願寺法主現如上人に随行して、関信三、石川倫弘、成島柳北と共に欧州に洋行した人である。私は丁度折よく金沢にゆく機会があり、松任を訪ねた。未公開の資料であったが、理由を話すと、蔵から、松本白華の日記を出してきて見せて下さった。その中に、航海録があり、明治五年九月十三日に二百八十馬力のフランス船に乗って横浜を出航して以来の詳細な記事がある。その中に関信三の名がしばしばあらわれ、関は船に弱く、腹痛甚だしかったことや、香港に寄港した際、英国聖公会の教師を訪ねたことなどが記される。そして、明治六年一月八日に、関は一行から分かれて英国ロンドンに向けてゆくまでのことが記される。松本白華はフランスに留まるので、関信三に関する記録はここでとだえる。

この後、関信三は英国で何を学びどうしたのか、久しく疑問のままであった。このことをもう少し明らかにしてくれたのは、三

河国一色の郷土史家である杉浦廉平氏の調査記事である。明治六年一月八日一行と別れた関信三は、(月日まで松本白華の航海録と一致する)「独歩英国ロンドンに到り、尋いでレッズング(距ロンドン四十英里の小都会人口三、四万)にて、ミスシヨナリーカレッジ(プロテスタン宗教師に任ずべき普通学を卒業した老書生の入学する学校)に入学して……」とあり、神学校に入学したことになる。このあたりで、フレーベルを勉強したのであるとは私の想像である。もちろん、それ以前に、横浜譯者時代に、宣教師の間に入出入して、フレーベルの幼児教育思想にふれていた可能性はある。

幕末から明治初年の価値の変転期を生きた一人の幼児教育界の先達の生涯にひきつけられて、最初思っていた以上に、時間を費やすことになった。この人がフレーベルにひかれたのは、便宜的な考えからではなかったのだと思う。その前半生の耶蘇教誨者と、後半生のフレーベル主義幼児教育者とは、実に矛盾するもののように見える。しかし、ここに、この変転の時代を真摯に生きようとした一人の日本人の苦悩を見るような気がする。幼稚園の創設という一つの事の中にも、東洋と西洋との間に立たされ

た一人日本人の精神の戦いがかくされているのを見る。

(関信三についての報告は、『幼児の教育』六十一巻二号 昭和三十七年、および、六十七巻八号 昭和四十三年を参照されたい)

